

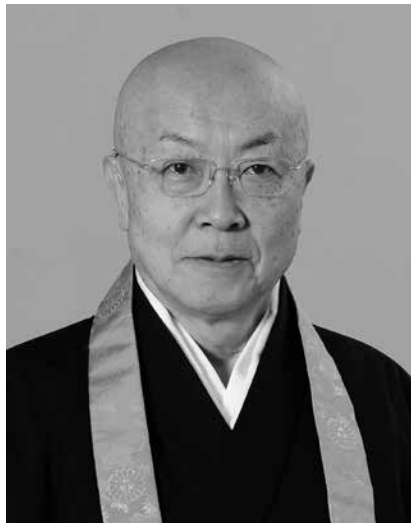


一般社団法人 大日本武徳会

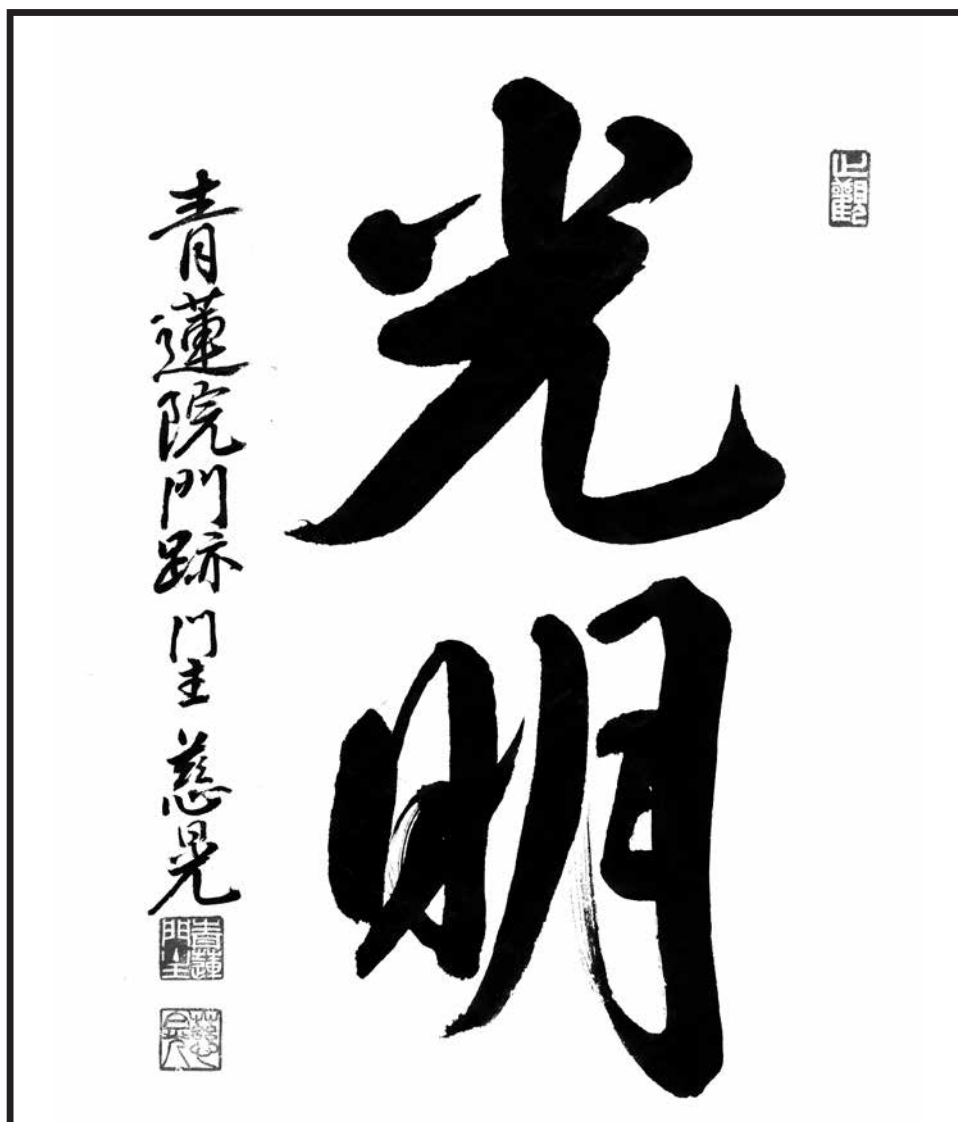
会報 **武徳**

2022.4 春季号





一般社団法人 大日本武徳会



一般社団法人大日本武徳会の未来的指針

濱田 鉄心

二〇一二年に法人化した一般社団法人大日本武徳会は今年創立百二十七周年を迎え、皆様方の精力的なご尽力とご協力により、肅々とその誇りある伝統武道文化を継承して参りました。

令和四年二〇二二年二月十三日、ズーム形式で開催された第九回定時社員総会で決議承認された内容はその報告書に記載されてあるように、令和四年度の本会企画主催行事の全てが予定案として理解されたことにあります。政府や自治体の現状の新型コロナウイルス感染予防対策が、果たしてどれだけの功を奏して我々が安全に安心して大会行事を実施できるかに掛かっています。我々が昨年八月に予測したように、海外での感染拡大が収束しないことやオミクロン新株の蔓延事態から政府は入国者に対して厳しい水際対策を講じており、第六回世界武徳祭は必然的に二〇二三年春まで延期と決定しました。しかしながら、その世界武徳祭が二〇二三年春に開催されるという確証は現状では得ることはできません。政府の隔離政策が撤廃されなければ非常に難しいというのは百も承知ですが、開催条件が適切な形で整わない限り至難の課題です。昨年の本会主催事業は、幸いにして唯一十一月十四日に秋の高段者審査会を実施する事が叶い、最上の成果が生まれましたが、これもひとえに参加者全員の感染予防対策に対して徹底したご協力の賜物であると感謝致します。本年度最大の課題は、如何にして創立百二十七周年第六十回全国武徳祭を安全に実施出来るかです。現在蔓延している新型コロナウイルスオミクロン株に関しても、科学的な根拠をもとにしたその特性については定かではありません。会員の健康安全を最優先する以上、確証が得られなければ実施は困難です。しかしながら、第六十回全国武徳祭は本会にとって大きな歴史的節目です。仮に実施する場合は当理事会において入念に協議を進め、京都府、京都市とも連携を取りながらその実現に向けて検討する所存です。この会報が皆様のお手元に届く頃には、何らかの結論が既に出されているものと思います。

その他の企画主催事業に関しても、公衆衛生上の問題が最大の壁となり我々が望むような方向に進まない可能性もあります。行事を実施する上で最低大人参加人数の確保も必要となります。さらに、これ等の問題は本会の財政上の運営に大きな圧迫を与え、極めて厳しい会計年度となる事が予測されます。その場合、本年度も皆様方に温かいご寄付のご支援をお願いせざるを得なくなりますが、何卒ご理解とご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

本会が法人化してから既に十年の月日が経ちましたが、世界的なコロナウイルス流行問題により多くの未来的事業が頓挫せざるを得なくなりました。正にコロナとの忍耐強い持久戦であると言えます。しかしながら私達の決意は固く、常に不撓不屈の精神で前向きに前進していかねばならないと考えます。「天は自ら助くる者を助く」と言われるように、まず私達が一丸となり最上の努力をしてこのパンデミックの厳しい時期を乗り越えていかなければならないと思います。本会の明日の未来は、今日私達が共に力を合わせて何をするかに掛かっています。

日本武道の伝統と歴史の最後の砦は正に一般社団法人大日本武徳会の健全な存続にかかっていると信じます。

この紙面をお借りしまして、役員一同に代わり、全会員の皆様の精力的なご支援とご協力に心から厚くお礼申し上げます。

第九回定時社員総会報告

令和四年（二〇二三年）二月十三日（日）午後一時三十分よりZOOMによりモート会議で、一般社団法人大日本武徳会第九回定時社員総会が開催された。出席正社員は委任状提出者七十九名を含む百七名により本定時社員総会は成立した。一般社団法人法に則り本会定款と内規に従って左記の通り報告事項並びに決議承認事項について報告します。

記

第一号議案 二〇二二年度事業報告及び収支決算報告の件

第二号議案 二〇二二年度会計監査報告の件

第一号議案・第二号議案合わせて原案通り決議承認された

第三号議案 二〇二二年度事業計画案の件

第四号議案 二〇二二年度収支予算書案の件

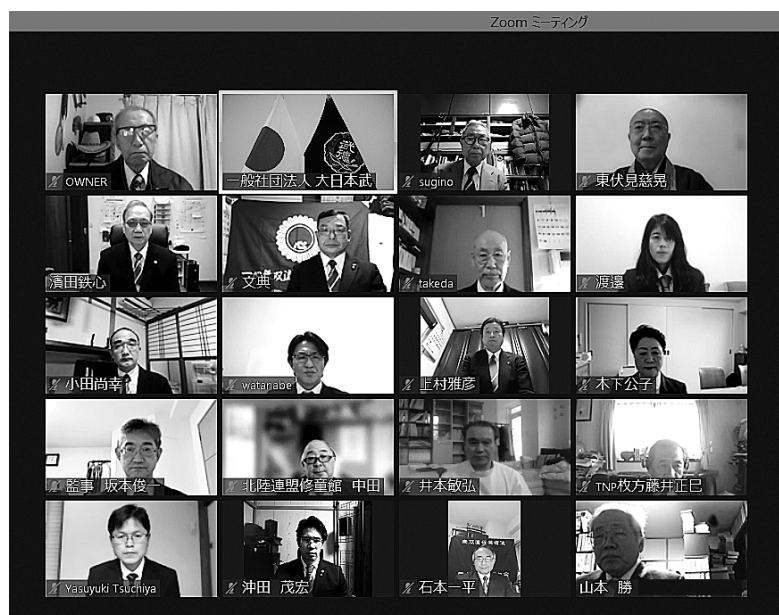
第三号議案・第四号議案合わせて原案通り決議承認された

第五号議案

内規と定款改訂事項の報告
定款は役員の変更と代表理事の住所変更がおこなわれた

報告事項

桑原兵充副総裁兼理事の逝去に伴う前副総裁の任期補填として濱田鉄心代表理事がその任期満了まで兼務することが、理事会において全会一致で決議承認されたことが報告された



二〇二二年度創立百二十七周年の記念主催事業の予定及び後援事業について、武徳会館設立構想案経過報告、会報編集報告、各団体近況報告の概要が述べられた

以上

一般社団法人 大日本武徳会

理事 山田 文典

第九回大日本武徳会総会に参加して

空手道 錬士 六段 土屋 恭之

第九回大日本武徳会総会に参加させて頂き、大変ありがとうございました。

私は伝統ある大日本武徳会に数年前に入会させて頂き、日々稽古の研鑽と伝統武道の精神を学ばせて頂いています。昨年の高段者審査会で六段の称号を頂きましたので、若輩者ではありますが正会員として今回の総会への参加をさせて頂くことができました。

今回はオミクロン株の流行のため、オンライン開催となりましたが、私の住まいが神奈川県ということもあり、交通の便が解消されて参加しやすい環境となりました。東伏見慈晃院下、濱田鉄心代表理事及び多くの諸先生方の真剣な姿は、より多くの会員のために大変なご苦労を惜しみなく、どんなに心を配って来ていた会であるかが、良く理解できる総会であったと思います。

今後の武道の役割は、学校や職場の人間関係の気薄化などにより、不登校や多くの悩みを抱える人など地域社会の抱える課題に対して、礼節を大切にすること、武道の精神を教えることにより、人々に希望と勇気を与えるきっかけ作りになるかと思っています。その中でも当団体は中心的役割を担う団体として、極めて重要な可能性を秘めていると思いました。

昨年、上村雅彦理事とお話をさせて頂いた際に、大日本武徳会は「世界平和のための武道を目指している」とおっしゃられていました。国連においても、SDP (Sport for Development and Peace) を掲げ、スポーツもただ競技を楽しむだけでなく、社会開発と平和活動をテーマにスポーツの参加者に対して社会への関心を高める意識改革を呼び掛けています。

これからもより多くの武道家が多く行事に参加され、多くの団体の見本として武道の継承を行うとともに、多くの団体の希望の懸け橋になることを心より願っております。

第九回定時社員総会に参加させて頂いて

至誠館 沖田 茂宏

この度初めて、定時社員総会に参加させて頂きました。

伝統ある大日本武徳会の、運営に関わるお話を拝聴できる場に参加させて頂いたこと、心より感謝申し上げます。非常に緊張しながらも、諸先生方のお話やお考えを伺う事ができる貴重な場でしたので、参加出来る事を心待ちにしておりました。

開催は、新型コロナウイルス オミクロン株の感染が広がっている為、安全性を重視されZoomでの開催となりましたが、画面越しにも伝わる緊迫感のなか進行されました。

昨年、令和三年度の事業報告について、丁寧に一項目ずつ結果と確認が行われましたが、一昨年に続き昨年予定されていた大会は軒並中止になっており、新型コロナウイルスの影響は大日本武徳会にとっても大きい事を改めて認識させられました。

今年度の事業計画についても、新株の感染が広がっており収束状況も不確定である為、予定通り進行できるのか難しい状態となっており、菌がゆい気持ちです。現状は道場での練習も難しく、自主鍛錬をされている方々もおられる状態ではありますが、こういった状況だからこそ、いつも以上に協力する意識を持ち、困難に対して向き合い、考え行動する事が必要だと思っております。

微力ながらも、大日本武徳会の目的としている、日本文化の伝承・青少年の育成・国際的な古武道発展の為、尽力してまいりますので、代表理事濱田鉄心先生、諸先生方、ご指導の程何卒よろしくお願い致します。

高段者審査会
合格者

【居合道】

六段

中野

秀人

六段

大崎

絵里

六段

山本

哲也

六段

渡辺

宏宏

六段

沖田

茂宏

七段

西本

善明

八段

渡邊佳

代子

八段

平松

裕蔵

八段

平林

裕蔵

【空手道・古武道】

六段

土屋

恭之

六段

森孝

司

八段

上村

雅彦



桑原兵充先生を偲んで

濱田 鉄心

まず初めに、偉大なる副総裁、桑原兵充先生のご逝去に接し、先生のご冥福を祈ると共に、ご遺族の皆様と御門弟の皆様深くお悔やみ申し上げます。

今は、唯々桑原先生の颯爽たるお姿がもう見られない事は悲痛の極みです。

先生は最後の一息瞬時まで厳しい病と闘われ、その絶大なる不撓不屈の精神は想像に余るものがございます。先生の突然の訃報は世界中に伝わり、多くの人が悲痛な涙と悲しみに包まれました。先生の偉大さは古今無双の武道家としてだけではなくその仁愛溢れた高潔な人格や人としての謙虚な生き様として多くの人達に語り継がれて行くことでしょう。先生の貴重な教えや武徳の精神を引きついで世界中に存在する人達から授かった叡智や技量を役立たせ、自らのさらなる修行や社会の為、そして世界平和の為に必ずや貢献してくれると信じます。桑原先生は、大正、昭和の激動の時代、平成と令和の厳しい変化の時代を堂々と生き抜いてこられ、誇るべき日本の侍精神の鏡として活躍されてきた真の武道家であられたことは言うまでもありません。

振り返れば、当方が半世紀以上前より、当会初代理事長の大野熊雄先生からの要請でアメリカを含める海外支部を束ねて国際支部を創設し、アメリカの大学道場で奮闘しておりました折、平成二十年に理事長にご就任された桑原先生から本会をさらに世界的な発展に導くために副理事長の任務を受けてもらいたいと要請されて以来、浅学菲才の身ではありましたが、必死でひたすら本会の国際的発展に努力して参りました。それ以来、次々と国際的なビジョンを拡大し、英国、アメリカ、フランス、カナダでの盛大な国際武徳祭やポルトガル、ギリシャ、ベルギー、スペインなどで国際錬成大会を展開し、その都度、桑原先生には絶大なご支援とご協力を賜り、さらに美しき桑原プロムナードの桜並木を各国で造園し、日本文化を誇りある形で後の世に残すことが叶いました。春になれば世界中でこの桑原プロムナードに人々が集まり、見事に咲き誇る吉野桜が開花された中で、愛に満ち溢れた喜びの集いが開催されます。二〇一〇年のアメリカ支部四十五周年記念

ではアメリカ国会議事堂上に桑原先生の栄誉とご功績を称え星条旗を高々と掲揚する事が出来たことも本会の輝かしき歴史的な一ページでありました。アメリカで奮闘する門下生の為に、桑原先生に書いて頂いた闘魂の書は私達に今もなお大きな励みの力を与えてくれています。さらに六十年間近くも達成されていなかった本会の法人化も二〇一二年に一挙に実現させて、桑原先生に初代代表理事に就任していただきました事は、我々にとつて最高の名誉でした。そして二〇一二年に当方が東北大地震で多大な被害を被った被災地に物資の支援のみならず、石巻市大川小学校を含む被災地の子供達に夢を与える為のアメリカホームステイプログラムを企画した折も桑原先生には絶大なご支援と応援をして頂きました事が子供たちの未来への希望と美しい思い出として印象に残っております。さらに二〇一六年に華々しく開催された第五回世界武徳祭では彬子女王殿下にもご臨席願ひ、桑原先生の開会式での晴れやかなご挨拶が多くの人達の心を和ませ、素晴らしい交流の喜びが分かち合える機会となりました。

本日に言葉では全ての出来事は十分に表現できませんが、先生と忘れることがない貴重な人生の旅を共にさせていただいた事が私にとって一生の宝となりました。

世界中で武道の素晴らしさと、その伝統的な和魂の心に満ち溢れた武士（もののふ）の精神を広められ、さらに深遠な武徳の価値観を精神的に啓蒙してこれらことで幾多の人達に人生の感動と喜びを与えて来られた桑原先生の比類なき偉大さは、言葉では言い尽くす事は出来ません。先生の武道に対する絶大な情熱や魂のこもった真の柔の卓越した演武は見事に完成された無双の超人として幾多の人々に感動や深い感銘を与えて来られました。武徳殿においてその威風堂々としたお姿を再び拝見する事が出来ない事が誠に残念でなりません。

今、私達はこの悲痛な悲しみを乗り越え、桑原先生の御冥福を静かに祈ると共に、先生が残された歴史的な偉業を引き継いで、これからも切磋琢磨していくことでささやかな供養になればと願うばかりです。本会が次回の第六〇回全国武徳祭を桑原先生の追悼大会として開会するとき、全ての人は先生の不滅の精神に対して深く敬意を表し、先生が培われた日本伝統武道の素晴らしさを継承していくことに更なる生き甲斐を見つけてくれることを信じてやみません。さらにアメリカにおいて毎年開催される国際部顕彰大会では桑原先生の栄誉を称え桑原杯を優秀な武道団体に授与して、未来永劫に先生のレガシーを世界的に継承していく所存です。

私達は桑原先生の武徳の精神が永遠に不滅である事を信じ、先生が無限の風になつて世界中の多くの人達に静かなる闘魂の情熱と信念を与え続ける事を祈ります。



辻野 正勝

嗚呼、悲しき哉
唯一無二、掛け替えない私の宝、
偉大なる肉親に勝る

桑原兵充先生の思い掛けない訃報に接し驚愕の極み、只々哀悼の誠を捧げます。顧みますと先生とは誠に不思議なご縁でした。お互い大楠公と桑原氏の流れを汲む一族として名乗り合い、堅い絆を結びました。

爾来、おのおの大日本武徳会の理事長に指名された時、お互い、理事長と副理事長を前提にして、衆議一致を見ました。常に誤りなきように改革しました。決算期の改正、そして何よりも東伏見様の会長を改め、総裁と尊称、皇室との関連を強調いたしました。

海外への武道奨励と世界大会への前進は現理事長の偉大なる功績の積み重ね、誰一人その決死の覚悟には頭を垂れる思いです。その力を存分に発揮して今日の世界大会の光輝ある進展に一本踏み込む力を支えられた桑原副総裁の手腕は偉大なるものでした。

末筆乍ら、

桑原兵充先生の宇宙の彼方より大日本武徳会の更なる発展を看護られる姿を夢見ながら粗辞を申し上げます。
拝礼

中田 武太

桑原兵充先生の訃報を知ったのは、十月の大日本武徳会からのお知らせで知りました。お知らせによると先生は既に八月二十七日にご逝去されたと先生のご令嬢からのお手紙で分かったと記されてありました。

茲に改めて桑原兵充先生の御逝去を悼み心からお悔やみを申し上げます。又、お心安らかにと心からご冥福を申し上げます。

先生とは武徳会の理事会を通じてお付き合いをさせて頂きました。企画の先頭に立つて武徳会の運営や発展のために並々ならぬご尽力を下さいました。又、演武をされる時は皆様周知のとおりですが、ご高齢にもかかわらず息を乱さず最後までやり抜く姿勢には頭が下がります。或る時、海外での武徳祭でのご様子が目

に焼き付いています。高島先生を相手に演武を続けていくうちに、徐々に熱が入り場内も桑原・高島両先生の所作一点に注目し、三十分余の時間を感じさせない柔術の技に会場全体が引き込まれて拍手歓声の渦と化したことを目の当たりにした感激は忘れられません。日本武道の心技体一体の真髄を、大日本武徳会の最高位として外国の武道家の会員に知って貰った事は感無量でした。

又、大日本武徳会以外に先生ご自身の企業は勿論、多岐に亘り大阪の名士だと聞き及んでいます。晩年、奥様を亡くされた先生はお一人のお住まいで、私が想像致しますには他人に言われない葛藤があたりだったのではないかと思います。そのことを思うと断腸の思いでたまりません。

合掌

竹田 豊

桑原兵充先生の突然の訃報に接し心から哀悼の意を捧げます。

桑原先生から伺ったお話を紹介して在りし日のお姿を偲びたいと思います。

当時的大阪武徳殿は天王寺公園内にあり、午前五時から午後十時まで休みなく稽古がおこなわれていたこと。施設内には上町台地からの地下水を溜めた広さ四畳半くらいの水風呂があり、一年を通じて水温は十五℃くらいに保たれ、稽古のあと水を浴びるようになっていたことなどをお聴きました。

このようなこともありました。食事中、技の話になり椅子から立ち上がり「突いてきてください」と言われ、突いていくと絶妙のタイミングで外され瞬時に突きを捌いた手が肩口を押さえ、肘は当方の胸に密着した状態に、攻撃はおろか逃げも倒れもできず、その場で不安定な姿勢をとらされたことがありました。

他の先生がたも桑原先生からさまざまなお話を聴きになっておられたと存じます。

また桑原先生は、どのような時でも周りの人たちへの気配りが細やかで優しいお方でした。

今となつてはお目にかかれな残念でなりません。

ご家族、ご門弟の皆さまには心からお悔やみ申し上げます。

渡邊佳代子

桑原兵充先生のご逝去の報に接し、寂しさを禁じ得ません。

生前、先生から今の自分と向き合い、今をどう生きるかで、明日その後の自分が作られる。日々の稽古の積み重ねは、無駄な動きを減らし、動ける体をつくる。常に呼吸と気を意識した稽古は、年を重ねても若く体格の良い者を投げ飛ばすことが出来る。どの様な武道家になりたいか。それを具体的に想像し、そうなれるように頑張りなさい。とご教示くださいました。今後の武道人生に向き合い、稽古を積み重ねていきたいと思ひます。

ご生前のお姿を偲びつつ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

上村 雅彦

桑原先生の訃報は驚きと残念無念なる思いでいっぱいです。

私の思い出は、常に武人であられたお姿です。

先生のお話を伺うのは主に理事会の時でありました。

ある時、技のお話をされ、私に腕を掴むようにと仰られました。本来そのような場面にて教えを頂く者として掴めと言われたら全力を成すべきだと考えます。しかし当時、既に九十歳を越えておられた先生に対し私は中途半端な力で腕を取らせていたのだのです。その私に技をかけていただき「肩から手に至る間が繋がっていない様に脱力する事が大事」と御教授くださいました。

武術は本当の強さが大切であると、ご年齢を感じさせない力強さと自信を常におもちになつておると感じさせられておりました。

またある時、喫茶店に私達数名の役員を連れていただき飲物を御注文下さいました。「ここはケーキが美味しいから」と飲み物にあわせて皆に御注文頂き、桑原先生とケーキの組合せは意外な一面をみる事ができました。

その時のスーツに帽子を召された御姿の先生が忘れられません。いつもの道衣お姿と違い足を組まれ珈琲カップを持つておられた格好が誠にダンディーであられました。

木村政彦と力道山の試合を会場に見に行かれたお話なども聞かせて頂きました。残念なのは戦後のお話をもう一度お聞きしたいと願っていたことが叶わなく

なったことです。

「GHQが日本上陸の時、大日本武徳会はどちらかと言えば案内役をした方で、武徳会がダメだとは言われていなかった」とお教えくださいました。

日本のある政党内部から『武道』は駄目だと話が出て、やがて解散しなければならなくなったのだとお話しくださいました。

この重要な大日本武徳会の歴史を更に詳しくお聞き出来なかったことが誠に惜しく感じます。

思い出すと、

・自家用車で大阪から武徳殿まで運転して来られた時のお姿。

・世界大会の時、三笠宮の彬子女王殿下がお越しになり、小走に急いで駆けられておられる桑原先生のお姿が目に残っております。

御元気で超人的な先生とお会いできなくなると考えますと残念であります。

今まで本当にありがとうございました。

御冥福をお祈り申します。

至誠館 藤井 正巳

平成二十年四月の理事会において桑原兵充先生が理事長になられる時に、その審査委員に選ばれ、その時桑原兵充先生を強く押しました。

それ以来、私共と親しくお付き合いいただき、公私とも武道を含め、私共の大切な師匠でありました。

今日、桑原兵充先生を失うことは何にも代えることのできない大きな損失であり、私自身にとって、身を切られるようなつらい思いであります。

桑原兵充先生とは以前より付き合いがあり、その時は桑原兵充先生があまりにも偉く、それほどの親しい付き合いは出来ませんでした。

理事長に桑原兵充先生がなられて以来親しくしていただき、わたくしが新道場を立ち上げた時も、すぐに承認していただきました。

桑原兵充先生は、私の親のようであり師匠でもあります。桑原兵充先生は、柔術ですが居合にも詳しく無刀取りで真剣を実際に握ったときの刀の握り方を教わりました。

以前理事会の帰りに、電車で桑原兵充先生と一緒に帰ったとき、座ってしゃべっ

ていて、わたしが桑原兵充先生に、「気のながれはわかるのですが、どのように出すか分かりません」、と言うと、桑原兵充先生がわたしの腕を握り「こうして出すのですよ」、と力を込めたようなしぐさをなさいました。私の腕に突然しびれが生じ、電気が流れたように感じました。腕は動きません、わたしが桑原兵充先生に「もういちどお願いします」、というと「危ないからだめ」と言われました。そのまま家に帰りました。不思議な感覚が腕に残っています。

そしてある時、桑原兵充先生と数人で歩いていた時、犬が吠えかかったそうです。桑原兵充先生が前に出て犬をじつと見つめると、スゴスゴとひきさがったそうです。

桑原兵充先生とは様々なエピソードがあり、それらが走馬灯のようにあたまをよぎります。

このような文章しか書きませんが、桑原兵充先生の技、気をもっと教わりたかったです。

桑原兵充先生のご冥福をお祈りいたします。

一心無双流居合道剣心会 総師範 山田 文典

この度、一般社団法人大日本武徳会副総裁兼理事・桑原兵充先生の突然の訃報に接し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

桑原先生のご逝去は、本会のみならず世界の武道界にとって大きな悲しみに包まれ、多くの武道家を落胆させたことと思います。

コロナ禍という、前代未聞の悪病と全身全霊をもって戦われた末、百歳を前に旅立たれたとお聞きしておりますが、決して病魔に屈せられたのではなく、最後まで武道精神により封じ込めた後に去られたと考えると身震いを感じる次第であります。事実、ご逝去の後、感染拡大は収束し、平穏な暮らしが徐々に戻って参りました。

桑原先生は、私にとって正に雲の上の存在であり、修行する武種の違いもあり、直接、ご指導をうけたことはございませんが、私にとって、別の大きい存在感がある出来事があり、そのことについてお話しします。

それは、多くの演武大会の開会式において桑原先生の開会の辞がございました。「伊勢神宮天照大神 御霊 鎮まります、この場所に置いて…」から始まるお

言葉の抑揚、所作は、私や参会した武道家にとって何かしら心を清らかにさせ、平常心を堅持させていただく魅力を感じさせ、毎回心の底で先生のお人柄に触れる一場面でもありました。そして、演じられる演武は高齢を微塵も感じさせないほど素早く、しなやかに繰り出される技は正に「神業」と参会者を魅了させ、特に記憶に残るのは、前回の世界武徳祭の折、桑原先生の演武に目を輝かせる外国人武道家の姿と演武後のいつまでもやまない拍手が、今も記憶に鮮明に残っております。

私も宗家を亡くした折、門弟一同、途方に暮れた思いをいたしました。桑原先生を師と仰ぐ門弟の皆さんも同様のお気持ちと察します。皆さんは、桑原先生から授かった素晴らしい武道の灯火を消すことなく精進を重ね、さらなる躍進を遂げられますことお祈り申し上げます。

私は、本会理事を拝命し、まだ一年足らずの未熟者ですが、桑原先生は今回、巨星となられ、天空から見守り、指導を続けていただいていることを肝に銘じ、今日まで心血を注いで築いてこられた「大日本武徳会」をさらに発展させていく決意であります。

中田 浩大

桑原先生とは海外で行われた世界武徳祭で何度か一緒にさせていただき、また、本会の役員になってからも各種大会でご挨拶程度の会話しか話したことはないのですが、いつも優しく、包み込んでくださる口調で話されていました。しかし、演武になると会場を巻き込むオーラがあり、引き込まれる思いになりました。晩年は、体調が悪いのか演武を見る機会が減りましたが、役員席での眼光鋭い視線で会員の演武を見ていたことは昨日のことのように覚えています。

桑原先生は、「武聖」といわれるに値される先生であつたと思います。謹んでご冥福をお祈りいたします。

心傳流柔術 北野 拓山

大きな星が流れ、私は指針を失った。

桑原先生は昭和四十五年頃、心傳流柔術（当時は組内兵法円心流柔術と称していた）に入門されて久保昭山先生から柔術の教伝と健康指導を受けられるようになり、後年、宗家、道主として当流を指導された。

入門当時、先生は長年柔道を中心に多くの武術を修行してこられた武道家であり、また、建築関係の会社を三―四社経営される大阪市中心区でトップクラスの高額納税実業家であつた。

然し、一方先生は、寝る時には常に電話機を三台程抱えて寝ると言つた超多忙で胃薬等多くの薬を服用し何時倒れても可笑しく無いと言つた健康状態にあつたので後年「私は久保先生に救つて頂いた」とよく言われていた。

先生は誰に対しても常に物腰柔らかく融和な態度だが、内には強力な闘魂を秘めた孤高の人で多くの逸話を残されている。

先生が入門された頃、私は柔術の技が少し極まりだし、また 務める会社での仕事も出来だした生意気盛りで先生より二十歳年下の若造であつたが、先生は私を道場や先生のご自宅等で、武道や実業の事そして人としての生き方について偉ぶることなく自然体でご教導下さり、その事が後々五十年強にわたつて続き私の指針となつた。

今回、会報編集委員会より先生を偲んで投稿するようにとの申し出を受けましたが先生との交わりは長く深いもので、とても私は短い時間で纏めることが出来ません、そこで、今回は先生から伺つた武道や実業等の事についてのエピソードや教えの一端を書いて先生を偲びたいと思います。

【先生の好奇心】

先生は若いころハワイでボクシングのリングに飛び込みで試合をされたり、八十歳の頃に、フルコンタクトの空手道場に入門されたり、九十八歳で亡くなる半程前には、私にボールペンと携帯用の小型電灯を見せて「これはアメリカの情報機関の人が携帯する武器だ、我々もこの様な物も研究しなければ成らない」と言われたりする等、生涯好奇心が旺盛であつた。

【先生が子供の頃から修行されてきた柔道についての教え】

得意技を作るなり相手の動きに合わせて我が技を出すのであつて、我から動い

て強引に得意技に持ち込むものではない。

常に力を入れず、相手の稽古着は軽く持て、先生は良く指二本で相手の襟を掴んで投げられていた。(私は始め誤解していたが、これは指二本でも良いのではなく、二本だから良いという事が後になって理解できた)

実業の事

【東京駅大丸百貨店内装工事の請負】

昭和三十九年の新幹線開通に合わせて大丸百貨店が東京駅に開店することになったが、工期が大変短く内装工事を何処の会社も引き受けるところが無かった。先生は、その工事を請け負われた上で工期を短縮する為に、東京の木場に作業所を作り内装をプレハブ化する。工事現場作業員の作業服の色を作業する階毎に変えて統一する。大阪から運ぶ部材を当時の国鉄十河総裁に話を通して開業前の新幹線で東京に運ぶ等当時では誰もできないような多くの工夫を凝らして期限内に工事を完成させられた。

【大阪府立体育館内の土俵建築の請負】

大阪府立体育館内に作る大相撲の土俵建築を先生が請け負われたが、先生は屋根を吊り下げにして四隅の柱を無くしたり、屋根上四隅に守護神を置く等考案された(これらは今に引き継がれている)。

【会社間のトラブル解消交渉】

先生の会社の関係先がやぐぎ企業とトラブルになったとき、先生はその解決のため民事不介入で中に入れない警察官を離れた物陰に待たせておいて、単身やぐぎ達が待つ建物に乗り込みトラブルを解決された。

その他の事

【人助け】

先生が大阪十三の道場から帰宅途中に阪急電車十三駅でプラットホームから転落した人が有り、電車が近づく中に先生が飛び降りて助け出された。その後、先生は騒ぎの中を名前も言わずに立ち去られた。

【運転免許の更新】

先生が八十才台後半の頃に自動車運転免許証の更新の為、運転シミュレーションテストを受けられたが後刻に係官から「機器が故障していたので再度受けてほしい」と呼び出されて、再テストを受けられたところ機器の故障ではなく先生の成績が良すぎたと言う事が解り係官が驚いた。

【肺炎からの生還】

先生は亡くなられる前年に肺炎を患われた。その折、夜中に急に息が出来なくなつたが、先生は「こんな事で死んでたまるか」との思いから自身の背中を何度も畳に打ち付けられた。そうしたら少し息が出来るようになり、朝まで待つて救急車を呼んで命を繋かれた。

このように書き出すと多くの事が思い出され尽きることがありません。

先生の御冥福を祈ります。

合掌

心傳流 高島 伸幸

桑原先生の冥福を祈り追想する事

先生は家族を深く愛され、またどんな時も何人にも慈愛に満ちたお人柄でございました。先生の生きて来られた道を軽々しく語るなどもつての外でございますが、少しでも記したいと存じます。

先生、もう口外してもよろしいでしょうか。

先生は幼少より柔道を稽古され中学の頃、大日本武徳会大阪支部で師から「早朝に来れるか」と言われ他言無用、非公開の稽古をする事になりましたが、それは嘉納先生が広められた体育柔道とは違う「柔道」でした。

大戦中は海軍に志願し、魚雷艇で荒波の南洋を駆け、座礁した島で終戦まで生き抜き無事帰国されました。

戦後は戸張道場の高弟として、長年柔術の技能的、精神的な保存継承に努めてこられました。桑原先生からは驚嘆するような数多くの武勇歴をお聴きしましたが、それらに関して細かく紹介することは、ここでは控えさせていただきます。

また実業家としては、東京デイズニールランド建設に携わり、東京八重洲口駅ビルから近隣の遊園地まで設計施工をされ、得意は百貨店の内装とインテリアデザインナーとしても活躍されました。

しかし、九四歳の春に死神が戦いを挑んで参りました。インフルエンザから肺炎、奇跡の回復なるも、秋に腎不全、九六歳の春に大腿骨折、懸命なりハビリで歩けるようになった時、死神は追い込まれ卑怯な手を。

数えきれないエピソードがございますが、何時も「武道をやっていたから、どんな困難も乗り越えられた」と微笑まれた姿が声が脳裏を離れません。

合掌

虚心流居合剣法 山本 楠城

大日本武徳会副総裁、名実ともに武徳の心を体現されていた桑原先生の訃報に接し、茫然自失、言葉ありません。

先生は壮年の頃、虚心流居合剣法誠道館の道場を利用して教えておられたこともあったことで、殊の外、いろいろとご指導ご鞭撻を賜りました。

先生は、そのお人柄は温厚にして篤実、武技は古流柔術のみならず、講道館柔道その他多くの武術も究められ武道界に比類なき貢献をされとともに、また福祉活動など地域社会においても多大の献身的貢献をされ、地域住民の尊敬を集めた方でした。

五、六年前のある日、理事会が終わつての帰り京阪電車でご一緒することになりました。神宮丸太町駅で乗車、四条京阪駅からは私は阪急乗り換えのため下車、先生はそのまま大阪まで乗車のはずでしたが、武道の本質、大日本武徳会のあり方等、私も忌憚なくお話させていただいたところ、話題がはずんで、駅のベンチでさらに続けて話しようということになり先生も四条京阪駅で下車、武徳会での思い出や将来への抱負等、時にはしみじみと、また時には熱く情熱的に語られ、気が付けば駅のベンチで二時間半経過、今更ながら先生の武徳会への思いの深さと、築き上げられた武徳と武人としての偉大さに感嘆しました。

桑原先生の偉大な業績とお人柄を偲ぶとともに、御冥福をお祈りいたします。

北陸連盟
修童館
長田 順一

昨年十月、令和三年度「武徳」秋号が届きました。コロナ渦で行事が自粛されている中武徳会会員の皆様方との交流も控えておりました。会報を拝読して各地の先生方の稽古近状を知ることが出来るとの思いで開封しましたところ、思いがけない書状が入っており、桑原先生逝去の知らせで、突然の訃報に驚愕しました。しばらく大会等に不参加されることが続き心配しておりました。本部にお話しをお聞きしますと奥様の看護等で手が掛かり参加を見合わせておられるが、ご自身は元気ですとの情報を得ており安心しておりました。夏場に急な体調不良、ご高齢でもあり急変してとのご案内でした。

先生の御高名は、武徳会会員ならば全ての方がご存知ですが、私が存じ上げている先生をご紹介させて頂きます。

先生と共に海外武徳祭に参加した時、お土産代わりに海外の方に話した言葉があります。日本には災難除け、特に雷除けの魔法の呪文があります。「くわばらくわばら」と言う言葉です。学問の神として知られる菅原の道真公が祭られている大宰府天満宮近くの桑畑に雷がよく落ちたそうです。雷が鳴った時、すなわち身に危険が迫った時に、呪文を唱えると難を逃れます。

武徳会理事長のお名前を唱えると言うことです。「くわばら・くわばら」を覚えて下さいと話しました。

百歳近くの人生をどう歩むか、先生の様な道を歩ける人は稀だと思います。九十歳を迎えても矍鑠と演武を披露する。私達も古武道槍術演武で床板の上に投げ飛ばされる形もあります。四十代五十代はなんとかありますが、六十代七十代は不安がよぎります。まして八十代九十代は、とても真似出来ない事です。

それを高島伸幸先生との師弟信頼関係の演武は見る方全てに注目されていました。気持ちが入ると時間を忘れての演技です。あの時の先生は無心ではなかったかと思えます。

理事長として武徳会を運営されているお姿にも感銘したことがあります。

「葉隠」に行事に臨む前の準備が大切との記載がありますが、それを実践しておられました。会合前の挨拶文・大会前の挨拶文と多岐にわたります。普通の人は、初めての役職で人前で挨拶する時は、準備をしますが、慣れてくると準備不足になる方をよく見ます。その為に何度か同じことを話したりするなどの失敗する方を見かけます。また会合開催の良い機会に十分な主旨を伝達出来ない先生もおいでます。残念です。

稽古始めの挨拶。「今日は○○を学びます」稽古終わりの挨拶「今日は○○が良かった」など気持ちを伝えることが大切と考えます。

桑原先生と会食した時のことです。桑原理事長・中田武太副理事長・高田寛次専務理事(当時の役職名)が地域において活躍され功労賞を受賞された折、京都の料亭において武徳会役員がお祝いの宴を開いたときことです。日頃は厳しい先生の優しいお言葉も覚えています。「今日はありがとう。良い集まりを企画してくれました。○○が心の残りました」です。地元での祝賀会と違い、武徳会有志のささやかな祝賀会を皆さんと楽しんでいたことも心に残ります。

小林信之先生がご尽力頂いた。名古屋城記念大会の折、槍術が三流派演武され

ました。神奈川県杉野至寛先生・茨城県市村剣舟先生・石川県中森茂範先生・国際支部の皆様方の合同演武を見て、古き戦国時代は、弓矢で始まり、槍で戦い、刀で戦う、そして組打ち、小太刀・柔術技のお言葉もありました。

長きに渡り「大日本武徳会」を導いて頂きました。平成二十四年の一般社団法人化そして初代代表理事その後副総裁にご就任、濱田鉄心代表理事のもと「大日本武徳会」は海外各地に桜の木を植え（令和三年会報秋号に写真記載）歩みを続けてきました。日本では、コロナ渦も下火になり令和四年度から新しい歩みが始まります。桑原先生が残されて足跡を大日本武徳会会員は忘れることはありません。会員一同と共に慎んでご冥福をお祈り致します。

合掌



在りし日の桑原先生（於：世界武徳祭）

井本 敏弘

先生からは何も教えて頂けませんでした。しかし、多くを学びました。有難うございました。

初めて桑原兵充先生に御会いしたのは、平成十八（二〇〇六）年、ベルギー武徳祭の折でした。大阪弁を話す、優しいような御爺様といった印象でした。ところが、演武になると御面相が変わります。一刀流聞書に「睨み殺す」、と云うのがあります。眼に力を入れるのではなく、腹に「うん」と気合を入れ、その気合を相手に通じさせる事ですが、まさしく之を具現されて居られる様でした。

人間歳を取ると筋力のアンバランスが生じ、姿勢が悪く成りがちですが、先生の御演武は最後まで背筋が伸びて居られました。どれだけの稽古を積み重ねられ、鍛えて来られたのでしょうか。未だ修行中の身には想像も付きません。

桑原兵充先生は、私が目標とする素晴らしい武人の御一人でした。色々御世話になり、有難うございました。

先生、天上でも御稽古されて居られますでしょうか…。

大阪府支部
評議員

尾ノ上 克己
尾ノ上伊佐子

故 桑原兵充先生のご霊前に謹んで哀悼の誠を捧げます。

先生は生前より、私たち一般社団法人大日本武徳会大阪府支部、居合道の偉大なる指導者として、常に温顔をたたえ、私たちの緊張をほぐして、激励して下さいたことを忘れることは出来ません。

先生は又、私同様、武徳和魂会の剣道の部、尾ノ上伊佐子ともども指導して頂き、有難う感謝いたします。

誠に意あつて言葉足らずの粗辞であります、之をもって私たちの精一杯の弔辞といたします。

黙祷

武徳の泉

目次

和歌に顕れた武士道〈後編〉

木俣 修
… 23

柔の道四十年〈後編〉

戸張 和
… 27

昭和五十二年新春の雑感

安達 保正
… 28

〈後編〉

すでに冒頭に於いて述べたように鎌倉時代の国民道徳の中に特異な地位を占めて、発達展開して行った武士道は正しい国体観を以てすれば、全く国体に背馳したものとなるわけである。勇敢を尚び、功名をねがひ、礼儀をあつくし、人の情を解し、体面を重んずると云うような風潮は、それ自身に於いて、善風美德としてうなづく事が出来るし、これらの風流が国民精神の上にもたらした影響には重大なものがあつたのではあるが、根本に於いて尽忠の対者を誤っていたと云うことは覆うすべもなき明白な事実である。武家社会に於ける如上の武士道の精神とその面を窺うべき話柄は当時の軍記物語等の中に豊かにあらわれているのであるが、和歌の上には殆んどこれと云うあらわれを見出すことが出来ない。平安朝時代に於ける個性の深化と云うような風潮の行きづまりから民族の出発点に帰ろうとする機運の激しく動き出した時代であつたから、和歌の上に於いても万葉集の精神に共通する民族精神を歌った歌は間々見つけることは出来

るけれども、かの実朝の抱懐した益良男ごころのごときものは、他の作者のどの歌からも見ることは出来ないのである。

元寇の時、頑敵を鏖殺して、わが国を金匱無欠の国たらしめたのは、他にいろいろの原因が数えられるであろうが、まさに国難に直面したもののふの道貫徹したところに起因すると考えることが出来る。かかる国難を眼のあたりにした当時の人々が何故にそのをどころを歌わなかったのであろうかと、不思議に思う程、元寇の歌と云うものは残っていないのである。今日のおほみいさに於いて、参戦の將兵も国民も挙げて、その至情を歌に詠みあげていると云う事実と比べ見て感慨の深いものがあるのである。

東の方に久しく侍りてひたすらもの
のふの道にのみ携りつつ征東將軍の
宣旨など下されしも思ひの外なるや
うにおぼえてよみ侍りし

思ひきや手もふれざりし梓弓
起きふし我身なれむものとは

宗良親王

同じ頃武藏の国へうちこえてことさ
しはらといふ所におりいて手分など
し侍りし時いさみあるべきよしつは
ものどもにめし仰せ侍りしついでに
思ひつづけ侍りし

君のため世の為何か惜しからむ

捨ててかひある命なりせば

君がためわが取りきつる梓弓

もとの都にかへさざらめや

前内大臣隆

皇国二千六百有余年の歴史を通じて
吉野朝廷の時代ほど忠魂が芳しく咲き
薫った時代はなかったと云つても過言
ではなからう。尊き御身の宗良親王を
はじめ奉り幾多の忠臣烈士が、やるせ
なき悲情を述べ、燃えさかる尽忠のま
ごころを托した和歌は「新葉和歌集」
の一卷に凝集されている。われわれは
この新葉集の和歌の中にもののふの道
が烈々として最も正しく脈うっている
ことを思うものである。ここに抄いた
「君のため世の為何か惜しからむ」と
云う御精神、「君がためわが取りきつ
る梓弓」と云う真情こそ古に発したも
ののふの道への強烈なる復帰であり、

鎌倉的武士道なるものに対する嚴重なる抗議である。

建武中興の前後に勤王の軍をおこし、国事に奔走した忠臣には思いの外、その志を述べた歌がない。兵馬倥傯のとき、それを求めるのは無理であろう。歌はなくとも、北畠親房の神皇正統記が残されたことを幸福としなければならぬ。

ここには菊池武時の歌一首を抄いておこう。

もののふの上矢^{うはや}のかぶら一筋に

思ふ心は神ぞ知るらむ

菊池 武時

後醍醐天皇が隠岐から伯耆の船上山に臨幸せられた時に、密かに勤王の計を奏して錦旗を賜って以来博多に奮戦して斃れるまで孤忠に生きた武將が至誠の一念を歌ったものである。一念に天皇をお思い申し上げている心は神がみそなはしてをられるであろうと述べたこの悲情は今日もなお人々を奮起せしめないではおかぬであらう。

江戸時代には国学者の歌、志士の歌にもののふの道の真髓に触れたものが

多い。否むしろ、もののふの道の道統は国学者、志士によって護持され顕揚されたのであると云うべきである。この時代そのものが、前代の文化の因襲化から離脱して古典に復帰し、古代の日本精神をつきとめて新しい文化の建設につきすすもうとした時代であったから、和歌のごときに於いても、万葉精神に帰れと云う運動なども顕著となりはしたが、所謂歌人の歌には、もののふの道への自覚と云う風のものは見ることが出来ないのである。

国学が勃興して以来、国学者が日本精神を根幹とした詠歌を多くものすこととなったのであるし、この国学が幕末の勤王運動に堅く結びついて、多くの尊皇攘夷の志士を生む所縁となり、これらの志士が一身を挺して国事に奔走する反面に於いて抱懐する所信を和歌の形として披瀝することとなったのである。

丈夫やよきもあしきも剣太刀

なが心よりなすといふなり

谷 真 潮

たひらけき御代にはあれど

もののふの道おこたらぬますら雄のとも

本居 太平

くろがねの櫓も甲も打くたく

此のつはものは国の守りぞ

小林 歌城

事しあらば君が御櫓となりぬべき

身はいたづらにくだしはてめや

伴 信 友

つかのまも忘れてあらめや剣太刀

とりてつかふるますらをの道

これらの歌にはますらをとしての覚悟、ますらをの道に対する信念が強く述べられている。信友の歌のごときは上代の憶良の「をのこやも」の歌の精神に通い、より力強いものを持っていると思われる。

男子にておはします人のうらやましければ

弓矢とり太刀さげ佩きて

来ん世には

君につかへむ身にうまれてむ

太田 垣 蓮 月

事しあらば誰か命を惜しむべき

君が恵にしげる夏草

伴 林 光 平

大君の醜の御楯と身をなさば

水漬く屍もなにかいとはむ

事しあらば我大君の大みため

人もかくこそ散るべかりけれ

(落花を見て)

天皇の御楯となりて散らむ身の

心は常に楽しくありけり

鈴 木 重 胤

歌人であり、国学者であつても何れ

もみな勤王の志に燃えたつていた人々

の歌である。これらの大君の辺にこそ

死なめかへりみはせじの精神の高揚

は、単に歌の上の空叫びではなく、身

を以て践み行つた道であつたのであ

る。

もののふの精神の象徴である日本刀

を歌つた歌も数多く眼につく。

事しあらばふみで打ちおき老人も

つるぎのたがみ取りしばかりてよ

加 納 諸 平

もののふがその佩刀に対する高いほ

こりとそれを佩くものの強い体面感を

歌つたものである。

弱腰になまもの著ける蝦夷人

我が日の本の太刀拝み見よ

橘 曙 覧

真荒男が朝廷思ひの忠実心眼を血に

染みて焼刃見澄ます

日本刀に対するこうした精神は、今

日軍人がその軍刀に寄せる精神に相通

ずるものがあると思う。

大丈夫のさびしき時は剣太刀

ぬきはなしてぞ見るべかりける

佐 久 良 東 雄

ことしあらばわが大君の

おほみため

いのち死なむとときし剣ぞ

この感懐は今日たにかいの場にある

軍人のひとしく抱懐するものと寸毫の

へだたりもないものであると確信する

次に勤王の志士のものふの道を歌

つた歌を見て行こうと思う。

安政元年八月十四日

すめがみのみことかしこみ

しづがみは

なり行くままにまかせこそすれ

吉 田 松 陰

述 懐

骨を粉にし身を砕つつ大君に

丹心を捧げてしがな

十月二十七日呼出の声をききて

身はたとひ武藏の野辺に

朽ちぬとも

留め置かまし大和魂

松陰の国体観、忠誠心は理念的追求

によつてなつたものではなく、国家の

安危に身をさらす臣道の実践の結果得

られたものである。松陰は君父の恩と

云うものを君恩の一元に帰している。

臣民は一切君恩の所与のものであり、

それ故に「我」の独立した存在を否定

し「我」を意識の根底におくような国

家的犠牲は認め得ないとするのであ

る。臣民は君主あつての臣民であつ

て、君徳顕現の為に存在するのが臣

道であるとするのである。所謂武士道

は松陰によつて、その根本的な誤謬が

正され、古来のもののふの道と吻合す

るものとなつて大成されたと考えるこ

とが出来る。ここに抄いた歌、何れも

そうした熱情のほとばしり出でたもの

である。

親のためつねは惜しみて

事しあらば

君ゆえすてむ命なりけり

大 国 隆 正

おやの為をしむ命を君の為

捨つべき時にすつべかりけり

かばねはも草むせ水づけ国のため

心のぬぼこ通さざらめや

君が代を思ふ心のひと筋に

吾身ありとは思はざりけり

梅 田 雲 浜

もののふの臣の男はかかる世に

何床の上に老いはてぬべき

久 坂 玄 端

数ならぬ身にはあれども希はくば

錦の旗のもとに死にてむ

平 野 国 臣

君がため誠の道やつくさなむ

ありて甲斐なき我が身ながらも

武 田 耕 雲 斎

もののふの大和心をより合せ

すえ一すぢの大縄とせよ

野 村 望 東 尼

これらの歌は作者はすべて史上に高名の烈士であるが、君の為にのみ自己の存在の理由を見出し、君の詔のまにまに動くべき臣道を実践した人ばかり

であるから、その詠歌いづれもみな一

読肺腑に深くしみ入りごときひびきを

藏しているのである。維新の大業の原

動力となった人々の面目はこれらの歌

の上に明瞭に示されているのである。

しづたまき数ならぬ身も時を得て

天皇のみ為に死なむとぞ思ふ

児 島 草 臣

ますらをが思ひこめにし一筋は

七生かふとも何たわむべき

渋谷伊予作

大君の御楯となりて捨つる身と

思へば軽きわが命かな

津 田 愛 之 助

大君の御旗の下に死してこそ

人と生れし甲斐はありけれ

田 中 河 内 介

前に挙げた人々に比べて広く名の通っていない人々であるが、何れもみな幕末に於いて尊皇の旗のもとに烈々の義挙を遂げた人々ばかりである。草莽の微臣の変闘の至情は一首一首にあふれ満ちていて崇く尊い気魄に思わず襟を正さしめるのである。ここに抄いたのは極めて少数の作者の少数の歌にす

ぎないのであるが、このような烈士はまだ他に多数にあり、更にその詠出の高風は数えきれぬ程である。

以上概略ではあるが和歌にあらわれたるもののふの道を上代から幕末まで歴史的に観て来たのであるが、この記述の中に於いて、いささかももののふの道と云うものと、これが中途にしてゆがめられて成立した武士道と云うものとの本質的な相違を明らかにして来たつもりである。このもののふの道が明治以後如何に展開し、その精神が和歌の上に如何に顕現されているかをも本稿に於いて尋ねて見るつもりであった。殊に、今次のおほみいさに於いて、このもののふの道に対する自覚が如何に強烈に將士の下に、更に国民全般の上に滲透しているかと云うこと、その精神がどのように和歌の上にあらわれているかと云うことを述べたいと考えていたのであるが、記述が尨大となるためそれは又別の機会に譲り度いと思う。

昭和52年11月1日

大日本武徳会会報

秋季号 (8)

『柔の道四十年』



天神真揚流柔術五代宗家

戸張道場主
柔道範士

戸張 和

嬉しかったこと
悲しかったこと

柔の道四十年と云っても顧みれば長くもあり又、短かった様にも思われる。其の間を追憶して、嬉しかった思い出は、故郷新潟県と福島県との柔道試合で、当時の岡田正平知事からの招待で柔の形を演じた事であり又、生れた長女、瀧子の長命を願って健康のためにと、双葉山、男女川の両横綱に抱えられて撮影した事、および私が業が進まず憂鬱の日々が打続いた折に気晴らしの意味で、戸張が当時の北新地で一流芸者を総揚げして私を慰めてくれた。殊に家宝であった銘刀正宗一振りを貰った事(今も所持)など次々に走馬燈のよ

うに蘇がえる。併し一面私も女であり子の母として、一番悲しかったのは、瀧子を幼くして亡くした事であり、せめて幼稚園に上る日まで戸張が存命して欲しかった事共であった。人命朝露の如しか嘆かわしい次第である。

戸張の生い立ちと

講道館入門

或る秋の夜長に戸張の生い立ちを聞かされた。生家は埼玉県戸塚で代々の本陣高橋家の次男で、生来の学問嫌い、柔術一途に精神を打ち込み、当時絶家になっていた戸張家を嗣いだとの事であった。歳二十余にして早くも村道場を開設し、「柔術は首にかけたワッパだ、生きている限り捨てぬ」と

酷寒酷暑も厭わず精魂こめて修練中、或る会で偶然にも柔道の創始者嘉納治五郎先生に出会い、「生死を賭ける武技、闘技の柔術から突く、殴る、蹴るの技を禁じて、現代人の思考方式に生れ変わった柔道とは自他共栄を旨とした国技である」と、こん／＼と説得された。当身は戸張の秘技であったが、講道館に入門後は「秘中口伝殺法穴所巻」は暫しお蔵入りしてしま

東京に於ける道場は、品川弥次郎邸四十枚から大塚坂下時代、富士見町時代、永昌寺時代等で特に富士見町時代が全盛であった。嘉納先生は古武道、柔術の御研究も深く、「古武道柔術研究所」を作られ世人の博識を広める事に努力され、特に戸張の活法は高く評価された。

柔術の突技(当身)の起源の一説について聞かされたが、約五千年昔、エジプトの古墳の壁画中に突技の一種が見られ、中国には黄帝時代に突技が萌芽し、手縛(蹴り突く技)、角觥(角力)等の技もあり、印度では、ワジラムスチーと呼ぶ一種の当身技(拳法)あり、朝鮮には借力、神借あり、ビルマでは緬甸、タイはタイ拳法、蒙古では喇嘛僧の間に伝承された拳法台湾には鶴拳法等の技があった。即ち拳法とは当身又、突技の事である。後世になって武道に流派がしきりに唱えられたが、例えば突技の知識が伝えられても知識だけ

では画餅に等しく、其の方法が百練々磨され、始めてその威力(技)が発揮されるもので、日本に入り永年に亘り研究工夫され、技の一種を取り出して解かれても、気魄の籠もった技として磨き上げられている。柔術の免許皆伝を土台に柔道講道館の門人となった戸張武合大將は追憶をこう語る。

九州入り、海外遠征、

堂ビル開院

嘉納先生から選抜され九州支部長として熊本へ。これは大役で熊本在住の士族達は、他府県の古武道や武道家を毛嫌いすること甚しく、或る時は背後から袈裟斬りに斬りつけられ(羽織のみ裂かれ)、併し道場の焼打ちだけは免れなかった。海外遠征四、五年中ブタベストでヨハネス・ペター博士からハイルギムナスチック療法を二ヶ年に亘り修得(この二年間は懸命に勉学す。行く先々での勝利の叫びを胸に秘めて悦に入る幾年月。帰途船中で大トランク二個紛失、夢の宝物(到来品・収集品)は消え去る。幸い手元の証書類や各国大統領から戴いた勝利のワッペンは無事であった。

大正十二年夏、当時新築の堂ビル二階に日本最初のビル内接骨院を開設。洋行帰りの柔道家が西洋の新接骨術を施行するとの事で、患者は絶えず盛況が続いた。戸張生存中は、一日三升酒と云われる程酒豪であったが、理由は

詳らかではないが突然禁酒を断行した。一旦決心すると徹頭徹尾実行する人で又、人々に対しても少時も厭きを与えない不思議な人であった。それ等の人格が彼を成功させた秘決かも知れない。

逝かれた淋しさも自分なりに、こう思いたい。「殺されても死なぬぞ、わしは百才男だ」と云っていた武骨一徹な生不動先生が生きていたら、空襲で全焼した際にも泰然自若として構えて居ただろうと、私の脳裏に印象づけた。四天王寺の本宅は焼かれたが、堂ビル出張所を改造して、住居兼道場とし、入門者を待ったが誰一人入門の気配がない。焼跡の整理、食衣の買出し等に忙殺される毎日であつてみれば仕方もない。併し後えは引けぬ。倒れる処までやる心算であった。時々頭陀袋の虎の巻五巻の水切りや修理等で道場一面に広げて手入れに余念もなく、此の時期が一生で一番長かった歳月であった。

戸張の武訓を思い出す

○時を味方にすれば、如何なる事も勝るとれる

○柔の探究は人を生かす事と知る

○一期の夢唯此の道に狂う
長かった、長かったが待てば海路の何とやらで、来た、来ました、ゲートル巻きの学徒、菜葉服の青年、国民服の人々等、一ヶ年と経ぬまに道場せまし。でも二度ビックリ。それもその筈、他道場

大日本武徳会会報

昭和52年11月1日

の立ち上がりも遅れ、その上柔道の認められるか否か等の新聞のニュースも伝わり混迷していた。併し入門した若者達の稽古は厳しく一夜に二、三人はおちた。活法にはことかかぬがなま／＼しい毎晩が続いた。

或る晩、進駐軍が二人来て暫らく見学して帰った。禁止命令が出るのではないかと一同不安の中に稽古を続けた、併し杞憂に終った。一週間後には外人の入門者も来た。それも日本人女性の通訳同伴で、しかも通訳の女性も入門した。後で聞いた話だが、柔道は女性もやっているので、スポーツの一種として解されたらしい。先づ安心、危機は去った。その後ぼつ／＼外人入門者もあり、軍の家族寮や療養所へ招待され、柔の形を演し優遇もされた。

今日まで一万人近い門弟の出入りもあり、柔道では廿回余に亘り団体試合にも参加し選手達も実によく働いてくれた。又、年中行事

の一つである寒稽古（早朝五時—七時）の修業も今年で卅回を重ね古い門人の息子達も大学を卒業する年令に達し、二世達が道場に顔を見せるのも近いだろう。今となって年月の早くなったのが惜しい。顧みれば戸張の知人の財閥家、有名政治家の方々から後援会組織の申出も腰々あつた。今から考えると私の道場保持が危なしかつたのであろう。でも曲りなりにも初志を貫徹して今日に至った事を生き甲斐としているが、兎に角、柔の道四十年を一途に突走った事に自分ながら少々あきれている。

怒る意力を失えば老化すると云うが、今は何を怒ってよいか迷う。白髪の老女腰に弓を張り、黒塚の「山姥」もときを想像するも遠からず。

人生の旅、残り僅かにして、過去を以てて未来を切るか、明日は知らず、それでも私はこの道を行く。

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていただきました。
(昭和五十二年七月十八日発行)

昭和五十二年

新春の雑感

範士 安達 保正 (岡山県)

新年に当り先輩諸先生、後輩の皆様へ御目出度う御座居ます。今年もどうか宜敷と申し上げます。扱而八十年の歴史、口では簡単ですが種々雑多なことがありました。

反省して、今迄の人倫に反した行為はなかったか深く感ずるものがあります。先輩諸先生の教えを充分に守り得たか、自我の強い私として恥しい次第であります。今私のなし得ることは、諸先生の教えを一つ一つ後輩にパイプ役として伝えること以外に途はありません。特に内藤高治先生の教えは、道場はもちろん御自宅を訪問した

時に受けた教えは、今も忘れることが出来ません。剣道家としての倫理が多く、現在生存されておられる先生の教えを受けた人と話をして見て、如何に内藤先生が高潔な剣聖であらせられたか思い知らされます。

現在のスポーツを主にした剣道を先生が見られたら何と云われるか、先生は常に師たる者は師表として立派な人でなければならぬ。人の模範として心服されるように自から言動に注意して、自からを律するように教えられた。何でもないことであるが、実際に行なわれていないことが多い。蘇峰翁の言に「恩を知るは大人の心、恩を報ずるは英雄の心」報恩感謝の念を忘却し、専らエゴに徹し、独善強慾の権化となった感がある現在天誅の下るのは、遠くないように思わざるを得ない。祖国の伝統を体して道義を立てねばならない。

国ありて家あり
家ありて個人あり
個人ありて法あり
法ありて国があるのではないと思ふと云つて居られる。

現在のよう、エゴで他人のこなど考へない時代となつては、我々のような昔流の考へでは通らないかも知れないが、しかし人間は一人では生きられない。大自然の恵も他の人との助け合いに依つて生かされているのであるから、大自然に対して感謝がなくてはならないと思ふ。

自己の仕事は天職として感謝して働かせてもらうので、従つて世の中に腹を立てたり不足の思いをすることはない訳である。暑かろうが寒かろうが、一生懸命に働らくだけである。

平橋田中の言葉ではないが、いまやらねばいつ出来るおれがやらねば誰がやる六十、七十鼻たれ小僧男は「百から百から」でこの意

気が必要だと思ふ。老若の生命は明日と云う日はない。良寛のいまと云う一瞬に全力をかたむけることだと思ひます。一日一日が貴重な一日なのです。

先般、当団に於て部内大会を開催しました際、親子試合を致しました。約五十組、有段者の父親、初めて竹刀を持つ人等(婦人)、その結果は子供が大勝しました。父兄が剣道に対する認識を深め、今後は親の稽古日を定めて稽古して下さいとの申し出もあり非常に嬉しく思ひました。また先日、段級審査がありまして当団の五年生五人が一級進級しました。他の団は試合の強い団ですが、一人の進級もなく指導者が歎いておりました。私は稽古が第一で試合等は問題でない、心身共に立派な青少年を育成するのが目的であるので、私の目的が達せられつつあることが嬉しかったことです。

(御参考までに)
今年も頑張つて行きたいと存じます。諸先生の御健康を祈ります。

令和四年

合同稽古会及び免状授与式の開催結果

一心無双流居合道剣心会

総師範

山田 文典

当流派におきましては、一月八日に大津市中央公民館におきまして新春行事を開催いたしました。

一時減少した新型コロナウイルス感染は、新たなオミクロン株というウイルスに変異し昨年末から急速に感染が拡大して、道場が所在します京都・滋賀におきましても瞬く間に感染者が出ている状況から参加規模を縮小したうえで、消毒、定期的な換気を励行するなど感染防止対策を厳重にしての開催となりました。

最初に昨年、高段者審査において六段昇段を果たした大津道場中野師範代の免状披露を行い、流派昇段級者への免状授与式を実施し記念撮影を行いました。

合同稽古会は、総師範の戒の儀から始まり参加各道場ごとに演武を行い、総師範による基本稽古指導に続き、「演武評定会」として、演武の評価を昇段審査形式で行い、高得点を競い、優秀者を決める催しを行いました。

演武は、有段者（四段以下）、段外者の二部構成で、凜とした張り詰めた空気の中で真剣に取り組み、優秀者には武徳会のネクタイやタイピン、トートバックの賞品を授与いたしました。

参加者からは、「初演武を行い、爽やかな気持ちになった。今年も稽古を頑張ります。」などの感想が述べられ、今年も引き続き、修練に取り組んで参りたいと決意も新たにいたしました。



※写真撮影時のみマスクを外しています。

コロナ禍において

日本古武道武公館道場

木下 公子

昨年から新型コロナウイルス感染症が猛威をふるい、大変な日々が続きました。日本ではようやく感染者も少なくなり一息ついているところですが、

日本では、多くの人が感染対策を心がけ、規律正しく行動するなど、人に迷惑をかけないよう努力しています。我が国で道徳を重んじてきたことの結果ではないでしょうか。震災の際も世界で日本人の行動が称賛されていました。世界に誇れる美德だと感じています。

私は武道を修養するものとして、古武道の継承とともに「精神八分 技二分」と言われるように精神修養に重きを置き指導するよう心がけています。

私が子育てしていた頃、年配の方から「躰というのは面倒でも、言い続けること。行動で示し続けること。それが知らず知らずのうちに青少年の心に残り、何かの時に思い出し役に立つのだ」と教わったことがあります。それを思い出しながら、ことあるごとに常識やマナー、また相手の立場になって考えることなどと言いつけることにしています。

居合のお稽古も同じことで、何度も同じことの繰り返しです。同じことを何度も言い続け指導しなければ、変な癖が付くこともあります。古流ですので伝承を継いでもらうためには、我流にならないように基本に忠実にと厳しく言い続けています。

コロナ禍により団体行動がままならない日が続きましたが、一日も早い終息を願ひ皆様にお会いできますことを楽しみに、自己管理を心がけて過ごしたいと思います。

